

# アムールの風

正統右翼の論理

第12回 田中健之  
(黒龍會会長)

## 第二章

知られざる日本裏面史

大東亜戦争は果たして聖戦だったのか?②

中国青年子女達に対し、心から哀悼の念を禁じ得ない

頭山満の道統に連なる葦津珍彦も、『上海戦線より

帰りに記してあります。『今や中支全戦線は、日本軍に依って荒廃に帰して終った。総ての財物は掠奪せられ、総ての婦女子は辱められた。(略)かくて数百里の間、中国の地は蹂躪し

君の生涯は美しい』この文は、若い時から頭山満の側にあつて、中華革命の志士たちの民族主義的な信念をよく理解していた葦津珍彦だからこそ著わせた名文です。支那事変当時、愛国維新運動や大アジア主義運動の活動をしてきた人たちが、この戦争をどう見ていたのかがよくわかります。彼らは、愛国者であつたが故に、日本の国體の真姿を自ら毀損せしめるような行動をしていた日本軍、つまりどこの国の軍隊でもやっていた、同じような行動を批判したのです。日本軍は皇軍です。天皇のご稜威を顕現できる軍隊でなくてはならないのです。敵国の人民に対しても、天皇の威徳を分け与え、心から神の軍隊として感謝されるような軍隊であつてこそ、皇軍の真面目があるわけです。

「徳を以て怨みに報ゆ」

ここで蒋介石について触れます。蒋介石は元々、日本の陸軍士官学校に留学し、または革命家として日本

つくされようとしてゐる。

この日本軍が皇軍と僭称することを天は赦すであろうか。我が日本民族の清き地を伝へ来つた人々は之を赦し得るであろうか。

天譴は必ず来るであろう。必ず来らねばならぬ。

今や祖国の功利のどん底から理想の天涯へと飛躍せねばならぬ。然らずんば、亡国は遂に避け得られぬであろう。

私は抗日戦線の華と散つた数千万の中国の青年子女達に対し、心から哀悼の念を禁じ得ない。私は諸君とこそ力強い握手を交わし度かつたのである。

祖国を守らんとして、弱く後れた祖国を防衛せんとして山西の天険に、江南の平野に、若き命を棄てた諸

亡命をするなど、親日的な人物でした。なぜ日本は、親日的だった蒋介石を反日に追いやったのでしょうか? 日本が戦争に負けた時、蒋介石は、「徳を以て怨みに報ゆ」という寛大な対日政策を施しました。

その政策とは、大陸に残留していた日本軍人の即時帰国の支援と、戦後の賠償金の放棄でした。岸信介首相(当時)が昭和三十二(一九五七)年に初めて、日本の首相として公式に中華民国を訪問した時のことです。当時日本は、中華人民共和国(中国)とではなく、中華民国(台湾、蒋介石政権)と国交がありました。

この時に岸首相が「徳を以て怨みに報ゆ」という蒋介石主席の寛大な対日政策に対してお礼を述べたのです。それに対し蒋介石は、

「私が日本に留学や亡命した時に、頭山満先生から武士道の実践というものを学んだ。私はそれを実践しただけであつて、あなた方は私にお礼を言うのではなく頭山先生の墓参りをしなさい」と言われました。

この挿話については、岸信介の回顧録にはっきりと書いてあります。

中華革命の英雄で、蒋介石と並んで孫文の後継者と  
言われた、南京政府の汪兆銘も親日派です。戦後、漢  
奸というレッテルを貼られ、中華民国からも中華人民  
共和国からも歴史的に葬り去られた汪兆銘は、実は日  
本によって漢奸とされたのです。

汪兆銘が、蒋介石が支配する重慶から脱出して、彼  
が新政権を成立させるならば、中国から日本軍は撤兵  
するという約束が、日本軍と汪兆銘との間で成立して  
いました。

それは、日本軍が中国から撤兵する代わりに中国の  
治安は汪兆銘の軍隊が見るといふ交渉でした。

その約束については、蒋介石も承知して、汪兆銘に  
旅券を発給し、工作資金まで渡していました。

しかし、汪兆銘が重慶を脱出し、ヴェトナムのハノ  
イまで来た時に近衛三原則が出ます。この中では、日  
本軍の中国からの撤兵についてはまったく触れられて  
はおらず、むしろ華北における防共派兵を強調したに  
しか過ぎなかったのです。もちろん蒋介石も汪兆銘も  
面子が丸潰れとなりました。

日本政府によって面子を潰された蒋介石は怒って、  
汪兆銘の暗殺を企てます。この時、彼の腹心である

そこで、それを見分けるために、「和平反共建国」と  
書かれた黄色い長めの三角形の小さな幟のようなもの  
を旗の上に付けて、重慶政府の旗と区別するようにし  
ました。

孫文の片腕として、中華革命の英雄だった汪兆銘が  
漢奸という汚名を中国史上に遺す事になった原因は日  
本のご都合主義であったということを考えて時に、日  
本の正義はどこにあったのかと思わずにはいられませ  
ん。

汪兆銘は日本を信じ、日本と共に最後まで戦った日  
本の戦友なのです。

### ——同盟国の銃に斃れる日本兵——

日本に期待し、中華革命の拠点として選んだ孫文を、  
日本からソ連に追いやったのも日本でした。そして親  
日派だった蒋介石を反日へと追いやったのも、やはり  
日本だったのです。

もし日本が、蒋介石と一緒にあって共産党を倒して  
いれば、支那事変は起きなかつた可能性があり、中国  
大陸が赤化して、中華人民共和国が成立することはな

曾仲鳴が、汪兆銘の身代わりとなって犠牲になりました。  
蒋介石は、汪兆銘を裏切り者だとすることで、面  
子を保とうとしました。

一方汪兆銘は、あえて自分が裏切り者となること  
を覚悟していました。彼が行った日本との和平路線  
は、日本軍に占領された地区の中国人を守り続けまし  
た。日本にいる華僑たちは汪兆銘政権を支持すること  
によって、日本における華僑の財産と生命が守られた  
のです。

在日神戸華僑の長老でリーダーだった陳徳仁さんが  
常々、私に次のように語っておられました。

「自分たち日本で生活する華僑は、汪兆銘によって  
生命と財産を日本軍から守られた。彼はけっして漢奸  
などではない」と。

当時の横浜や神戸の中華街の写真を見ても、汪兆銘  
政権の旗一色です。当初、日本政府は五色旗を汪兆銘  
政権の国旗にさせようとしたが、汪兆銘は最後まで  
で、孫文の中華革命の象徴とも言わなければならない。  
紅旗を掲げるべきことを主張して譲りませんでした。

しかしその旗は、蒋介石の重慶政府の旗と変わらな  
いたために、敵味方の区別がつきません。

かっと思われま

中国共産党が、共産革命を行うために抗日を煽動し  
ていたことに対し、蒋介石は「邦交敦睦令」を公布して、  
抗日運動を厳しく取り締まりました。

彼は、「抗日は駄目だ。日本と戦争をしてはいけな  
い」と常々主張していました。蒋介石は、最後まで日  
本との戦争を回避する努力を続けました。

しかし、コミンテルンを背景にした、中国共産党の  
影響を強く受けた張学良と楊虎城によって蒋介石は、  
西安で身柄を拘束されて、日本と戦争をせざるを得な  
いように追い詰められて行きました。西安事件です。

ちなみに、この事件の中心人物である張学良は、張  
作霖の息子です。父親が日本軍によって爆殺されたこ  
とから日本に敵愾心を抱き、日本に対する復讐心から  
中国共産党やコミンテルンに接近して行った結果、西  
安事件を惹き起こしました。

一方、蒋介石は盧溝橋事件が起きた翌日から何度も  
停戦命令を出しています。

「日本と戦争してはいけない、抗日では駄目なんだ」と  
という蒋介石の叫びと願いは、抗日を利用して国民政  
府を倒そうとする中国共産党の抗日テロの煽動によつ

て打ち砕かれます。

激しく抗日を煽る中国共産党のテロは、実は日本に向けたテロというよりも、中国国民党を倒すための行動だったのです。

中国共産党による抗日行動によって、日本軍はどんどんと煽られました。

日本はそうした中国共産党の抗日の挑発に乗っかるわけです。日本は親日派だった蒋介石を抗日だと決めつけて、敵として戦ったのです。

ところで、蒋介石の軍事顧問は、ナチス・ドイツです。ナチス・ドイツと同じ鉄兜を被り、ナチス・ドイツと同様の軍服を着て、ナチス・ドイツが援助したドイツ製の武器で武装した蒋介石の中国国民党の軍隊と日本軍は戦うのです。

当時の日本は、ナチス・ドイツとは、イタリアとともに三国同盟を結んでいました。日本の盟邦であるドイツ製の機関銃で撃たれて、日本の兵隊たちは次々と斃れて行きました。

それにも関わらず日本は、三国同盟様々と言って、日本中がナチス・ドイツブームに浮かれていました。果たして、こんな馬鹿なことが許されるでしょうか？

## ——一人でも死んだら外交はダメ——

日本を戦争に引き摺り込んだのは、軍人よりも外交の愚かさ、政治家の国策のなさによる、大陸政策の誤りが原因でした。

支那事変によって、日本は国力を消耗し、疲弊したまま、そして多勢の兵隊が大陸で死んでいった中で、それでも米・英と戦える体力があったのでしょうか？ そのような観点からすると、大東亜戦争の大義名分は「アジア解放」という立派なものでしたが、対中国政策の誤りの延長線として突入した米・英戦に、果たして勝てるのか、という疑問が湧いて来ることは、当然なことです。

支那事変の時にアメリカは、表面的には中立でしたが、実は裏では戦闘機百機からなるアメリカ合衆国義勇軍「フライイング・タイガース」を派遣するなど、中国の蒋介石をずいぶんと応援していました。

しかし、日本は、当初から中国の裏で戦争を煽り続けていたアメリカやイギリスを叩く度胸がなかったのです。

何故ならば、アメリカ、イギリスは強いからです。

中国を叩くことは、蒋介石の背後にいる米・英の脅かしになって、ちょうど良いだろうと思って、日本は支那事変をしたと言っても過言ではありません。

しかし、その戦争はズルズルと泥沼になるわけです。南京事件も、あったのか、なかったのか、という犠牲者の数が問題なのではありません。

日華の戦争があったという事実、そして、一人でもその戦争によって死んでいる事実こそが、日本外交の失敗であったのだと、私は思っています。本来、味方にすべき国を敵として泥沼戦を強いた戦いが、支那事変の実態だったのです。

親日的な蒋介石において、せっかく中国で親日政権ができるチャンスを持ちながら、日本は自ら中国大陸での足掛かりを失う結果を招いたのです。それぞれどこか、支那事変の結果、中国を赤化してしまった日本の責任は、計り知れないくらい大きいと言わざるを得ません。

本来ならば親日政権になるはずの中国を反日へと、日本は追いやりました。

辛亥革命の時もそれと同様でした。みんな日本への

留学生で日本が好きでした。

彼ら清国からの留学生たちは、明治維新に学んで、日本をモデルに祖国の近代化を計ろうとしていました。そして祖国の近代化を計るためには、半封建半植民地に転落した清朝を倒して、漢民族による共和国を建設する革命が必要でありました。

しかし日本政府は、そういう動きに対してまったく理解がありませんでした。

ついでに言うと、中国共産党を創立した人々も日本に留学生した人々でした。

彼らは中国に、高島素之が日本語訳した、マルクスの著書『資本論』をはじめ、色々な社会主義に関する日本語の文献を日本から中国へと持って行きました。従って、社会主義用語は日本から中国へ輸入されたものでした。

中国共産党を創設した李大釗や陳独秀は早稲田大学の留学生でした。周恩来や郭沫若も留学生です。中国共産党の草創期のメンバーのほとんどが日本に留学した人々で占められていました。

こうして彼らは、日本から共産主義者関係の文献を中国に持ち込んで、共産主義思想を学んだのです。

そこに旧ソ連から入ってきたコミンテルンという国際組織によって、中国共産党が組織されて行きました。

## ——中国という国は1+1≠2ではない——

中国の革命家、廖仲愷<sup>りょうちゆうけい</sup>の息子である廖承志<sup>りょうしょうし</sup>は、日中国交回復の時の中日友好協会会長で親日派です。孫文夫人の宋慶齡<sup>そうけいれい</sup>も中国共産党の党員ではありませんが、中国共産党政権下で大陸に残って、毛沢東時代の国家名誉主席になっています。彼女は汪兆銘との関係が深く、彼を支持していたために蒋介石と折り合いが悪く、中国国民党が政権を台湾に移した時に、大陸を脱出して、台湾には行きませんでした。

汪兆銘は中国国民党左派出身で、その関係から汪兆銘政権では、汪兆銘亡き後の周仏海<sup>しゅうふつかい</sup>、陳公博<sup>ちんこうはく</sup>という二人の南京政府の主席は、中国共産党第一回大会の代表でした。毛沢東もそれに参加していました。

中国において今でも上海政府とかの一部の中国共産党員には、汪兆銘政権の残党もいます。

少しわかりにくい話ですが、そうした意味では、中国という国は1+1≠2という公式の通りにならない

ところで頭山満は、

「汪も蔣も一つ。孫文の弟子。真心を南京に示せば重慶に伝わる」

と言っています。そして「それは延安にも伝わる」と言っていました。

昭和十九(一九四四)年十月五日、頭山満が逝去した際には、重慶も南京もそして延安までも、皆が喪に服します。中国共産党の拠点である延安までもがです。

ということは、要する一見バラバラに、『三国志』さながらに三つ巴で激しく内戦をしていた、南京も重慶もそして延安までも中国は、一部は裏で繋がって、連絡とバランスを取り合っていた証拠です。それが中国なのです。五千年来、興亡を繰り返して来た、まさしくそれが中国の政治というものです。そのところを日本人はわかっていません。

前述しましたが、日本軍は、中国大陸からの日本軍の撤兵の約束を条件に、謀略で汪兆銘を引っ張り出して来ておきながら、それを蔑ろにして、冀東防共自治政権の増兵を発表し、汪兆銘と蒋介石のメンツを潰しています。

汪兆銘は自分が裏切り者になることを覚悟の上で、

国なのです。

中国を観る時には、必ず複眼的に見なくてはなりません。日本人は、中国の複雑さというものを理解も想像も出来ずに、ただ安直に、ただ単純に、公式論的に中国を見過ぎているために、中国の本当の姿を見ることをなくして、对中国政策を立てて、それに失敗するのです。

日本軍による汪兆銘工作に対して、頭山満は、中国の分断を強めるものだととして、それを支持しませんでした。

頭山満をはじめとする末永節<sup>みなせ</sup>、萱野長知<sup>かやのながと</sup>などの玄洋社の人々は、あくまでも重慶政府を正統な中国の政府と考えていました。

頭山満を始め、末永節や萱野長知などの玄洋社の関係者は、支那事変を早期終結させるために最後まで蒋介石を対手に重慶政府と地下で対華和平工作をしていたのです。

そのために当時の軍閥は、玄洋社の関係者を国賊のように言っていました。彼らは共産党員じゃなくて、正当な愛国者であったが故に、簡単に弾圧しきれない部分もありました。

日本占領地の中国人を保護していくわけです。そして欧米によって中国が分割された租界地の回収を断行し、欧米の支配地を中国に返還させました。

ちなみに日本が支援し、軍事訓練を施していた冀東防共自治政府の保安隊は、支那事変勃発直後の昭和十二(一九三七)年七月二十九日に、二百人以上の日本人居留民が虐殺された通州事件を惹き起こしています。保安部隊の対日感情は良くありませんでした。それを日本軍は友軍だと思つて、軍事訓練まで施していたのです。

実は、彼らは盧溝橋事件で日本軍と戦った中国国民党第二十九軍とかねてより繋がっており、「打倒日本」の密約を交わしていました。それが通州事件へとつながったのです。



田中 健之 (たなか たけゆき)

歴史作家、維新運動家、昭和38年11月3日生まれ、福岡市出身。玄洋社初代社長並岡浩太郎の重孫で、黒龍会を創立した内田良平の血脈を継承する親族。拓殖大学日本文化研究所近代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所及びモスクワ国立教育大学外国語学部客員研究員、日露善隣協会会長。2008年に黒龍会を再興し会長に就任。主な著書に「満洲に祀られる人々」、「昭和維新」、「北朝鮮の終焉」、「実は日本人が大好きなロシア人」、「横浜中華街」等。中央公論「正論」歴史群像などの論議誌に多数執筆。